

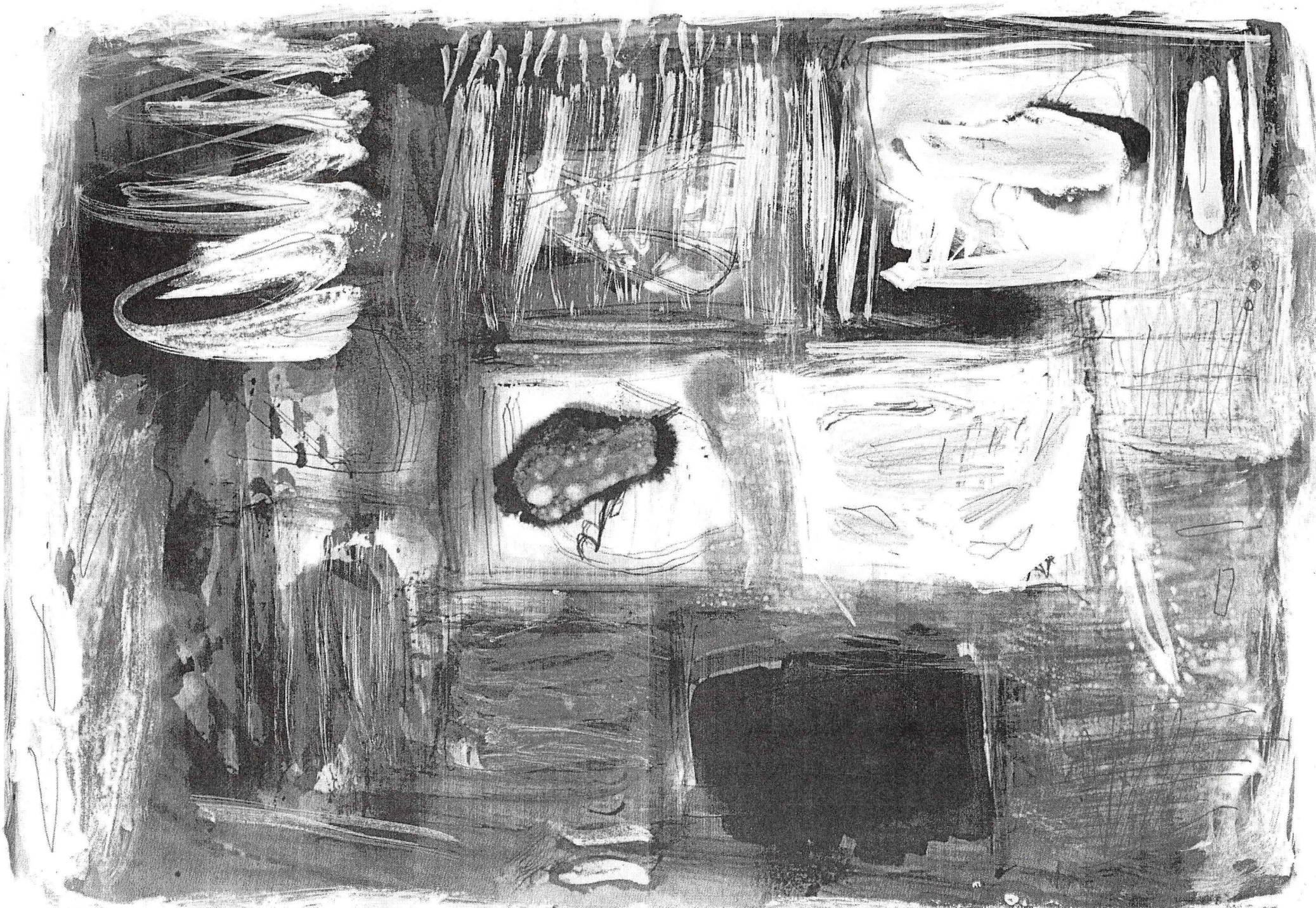
tab

No.
43

2
0
1
4
/
10
/
15

後藤美和子／野村龍／長尾高弘
福島敦子／秋川久紫／浅野言朗
小林埜嶋／中村剛彦／坂入進
水島英己／倉田良成

榊 II *Machilus thunbergii*



Kommt, ihr Töchter, helft mir klagen

Aug 2014

cont.

詩篇

後藤美和子：対岸の町で／02

野村 龍：夏／05

中村剛彦：イルシャンテ／07

福島敦子：空を見上げるのは・他2篇／09

長尾高弘：うまいぶどう／12

浅野言朗：秋・コレクション／14

水島英己：沈黙（1〜6）／16

小林増嶋：タンツムジーク／18

秋川久紫：もしも明日が…。♪・ほか／21

坂入 進：ジャックとベティ／26

倉田良成：青嵐図（鉄斎詩篇から）／29

文

中村剛彦：象徴の魔力 七ノ二／31

倉田良成：新・思い出す事など／36

長尾高弘：詩の源流―（連載5回）／43

あしがき集／49

画：和田彰

後藤美和子

対岸の町で

一

馬が群れている

土手の向こうの平原で

きつと一つの光があつて

みんなでそれをはんでいる

誰もいない

いくら眺めても薄い青い空

今日はのろしも上がらない

黄色い耕作機が

白い鳩たちを乗せて

一体どこへ進めばよいのかと考えている

打ち捨てられて何億年も

思いあぐねて見つめている

二

それで対岸にすわって

木にとまった鳥を見ている

鳥は飛ばなかつた

いつまでも影のまま

逆光の中にいつづけて

銀色になり、銅色になり

そのまま空の上にはりついて

一枚の鳥は自分が生きていないことを

決して誰にも知られなかつた

三

海に住む王者の

せめてしつぽの先が

この川に流れこんでくるといい

一瞬で混ざるミント水の色

うるこに込められた寂しさのかけらが

そつと町に触れて

その夜、みんなが少し

心の綿を湿らせた

そつと噛み

水分を取れば
それはもちろんしょっぱかった

(昏厨食七〇)

野村龍

夏

風に書き込まれた香りから
山椒魚の眠りが零れる

篝火の祈りは

遠ざかる精緻な輝きであり

積乱雲のなかで

瞳は時折寝返りを打つ

掌に託された願いは

澄んだ焰となつて

軟らかな盥の縁から

幾度も溢れ出し

研ぎ澄まされた祭文が

美しい咽喉を 或いはなめらかな舌を
事ある毎に みごとに捌いてみせたのだった

中村剛彦

イルシヤンテ

青い川にかかる黄金の橋を渡り

からつぽのチューハイ缶が転がるからつぽの夢の

夜の女たちの街にわけいと夜の蟬たちの香りがする

私には羽がないから

街角から街角へ光を避けて若葉の影を歩き

一夏の短い生を終える

そう、街角の、本当の街角の扉を開ける

鮭定食、鯖定食、ビールと競馬中継、仲間たち酔っぱらった蟬たち

やさしいマスターはひとり料理をする

キッチンから香りたつのは

焼いた鮭でも鯖でもない

三十年前のダンスホール「白馬車」で出会った若かった二人の影

夢見る蟬たちも若かった 人間の姿をした青い蟬たち

いまはひとり、マスターは丁寧に、静かに料理をする

いまはひとり、そして眠る蟬たち

「ぼくはずっと朝八時から夜中の二時三時まで働いてきたからね、大変だったね、これが最後のことばかな」

「息子があとをやってくれるさ」

店を出て扉を閉めると

聞こえてくる濡れた風鈴の音色

街角から街角へ

一夏の夢をひとつ閉じる。

福島敦子

空を見上げるのは

空を見上げるのは

どこにも行けないことを忘れるため

雨の音を聞いているのは

手を離したことを忘れるため

道ばたのツユクサの青に見とれるのは

地球の青さを思い出すため

さようなら

道

舗装された細い道が続いてる山
をくねくねと上っていく

あそこにもここにも
ヨモギやエノコログサが伸び放題の家
住む人はいない

子や孫は

遠い町で暮らしているのか
最初からいなかったのか

舗装された細い道は まだ
上へ上へと向かっている

陸の孤島

岬の向こうまで来てしまった
青さの違いが水平線
海風がごうごう鳴っている

あの頃は道がなかったけん
舟に乗ってお嫁に来たんよ

後ろや左右は山

前は海 どこまでも海

ほなけんど誰も帰ってこんけん
わたしが死んだら空き家にな…

波の音に消える

舗装された細い道だけが

白く光っている

長尾高弘

うまいぶどう

子どもの頃、

大人たちにとつて戦争は近い記憶だった。

何かのときに父が疎開していた頃の思い出話をして、

岡山にはグローコールマンというぶどうがあつて、

あんなにうまいぶどうはほかに食べたことがないな、
と言つた。

確かにそう言つたはずなんだけどな。

千葉の店では、

ぶどうと言えばデラウェア、巨峰、マスカット、
そういうしたものしかなくて、

グローコールマンは見たことがなかった。

京橋の千足屋に行けばあるよ、すごく高いんだ、
と父は言つていた。

疎開先では千足屋と直に取引をしていたという。

それからかれこれ四十年あまり、

横浜のスーパーでグローコールマンというものを見かけた。

話を聞いてから初めて見つけたのだ。

安売りで有名な店だけど、

ほかのぶどうと比べても、

特に高いものではなかった。

買って食べてみたけど、

それほどうまいものでもなかった。

千葉の父に会いに行ったときにその話をする、

父はにやつと笑って、

そうだろう、うまくなかっただろう、

と言った。

確かに認知症が出て、

計算が怪しげだったり、

わけがわからないことを言ったり、

まあそういう状態だったけど、

岡山もグローコールマンも覚えていたんだから、

そこはしっかりわかっていたと思うんだけどな。

とびきりうまいグローコールマンは、

どこに消えたんだろう？

浅野言朗

・秋・コレクション／Autumn Collection?

<extra>

放課後の公園、午後四時の、退潮。

潮が引くように、少女たちは青と緑の衣服に着替える。

<moire>

前にも後ろにも、動きまわる波紋だらけの出で立ちで、
街を歩く少女たち。

<walking>

シャッターの閉まった通り、黒ずんだ背景のランウェイ。
少女たちは走りながら、鳥になれるのだと思っていた。

<background music>

シヨ一の終わりに鳴り始めた音楽が、
少女たちを街の外れへと送り出す。

〈color trends〉

流行の色は青と緑の中間色で、
その色の羽を纏った鳥たちは、東の空へと飛んで行く。

〈coordinate〉

空を染め変えることは、彼女たちの仕事だ。
ほどなく、砕かれるような、色彩に。

〈haute couture〉

朝が来ると、青や緑のカラスはいなくなる。
鴉は物影で灰色に着替えて、公園で鳩を演じている。

水島英己

沈黙（1）（6）

城址公園の頂。サックスの音が聞こえる。人影は見えない。木々に隠されている。音と二人だけ。樹冠が風にゆれている。桜の葉が落ち始めた。黒い雲に覆われた西の空。東はまだ明るい。見ている、聞こえていることに集中せよ。考えるな、考えるな。登った道を今日は下る。山道のでこぼこ。すずしい風。（1）

ラガーディアに離着陸する飛行機の騒音。鈴木大拙の講義はその騒音のなか、小さな声で行われたという。コロンビア大学の受講生は殆ど寝ていたか、聞こえない声を伴奏として。コスモスの花の群舞も騒音のようだ。絶えざる音。受講生の一人だったケージは後年になって大拙の講義がはつきりと理解できたという。絶えざる沈黙の音。（2）

二人とも温かいから夜はやさしい。そう、水車はまわっているね。確かめることは疑うこと。自分という、分けられたものさびしさ。自らって、水が流れているよ。そう、水車はまわっているね。それでも、夜はやさしい。暗がりではないって、悪さではないって。顔をあげて。水車はまわっているね。（3）

過ぎ去ったと思った石のような悔いが金木犀の香りに息を吹き返す秋だ。無臭のまま生きること

はだれも望まない。プールの底に手をつけて這うように泳いでいても、やがて離水せざるをえないのだ。その音は傷を負っている。切れた下唇のような月。そんなに泣かないで。(4)

「わたしたちは愚かだが、生きる価値ぐらいはある」三角みづ紀の決め台詞をお守りにして、60半ばの男が右往左往している。今日も充分に愚かだった。こんな私を嫌う女生徒もいるのだ。それは、あたりまえで健康なこと。秀才で、受験に囚われているきみにも三角さんのこの言葉を教えてやりたいが、きみは。(5)

「うとうととして目が覚めると女はいつの間にか、隣の爺さんと話を始めてゐる。」迎えられていたので、放り出された朝に。アカルイ汽車の歌を口ずさむ。臆病だが走りつづける。ゆっくりと手でさわってめくってみる。破れたパラフィン紙のたてる音。読めない、古びた付箋の文字。そうではない、三四郎が目覚めるのだ。(6)

(連作詩「36」のうちの「沈黙」の6片)

小林 埴 塙

タンツムジーク

石があり

転ぶ。

枯れているのは薔薇ばかりで

花園が蒸し暑い。

指差して都市、

ビルディングの影のうつろいを追うように

噂話は急いで拡がる。

「急行」

と電光ながれて暗い方へ暗い方へ、

コンクリートからしたたる

水の一粒も

舐めてみたいものじゃあないか。

足があり

転ぶ。

ずいぶんなはなしですわねえ、

と、したり顔の医師は

白紙のカルテを汚すことがない。
ずいぶんはなはなしなんです。

枯れ放しなんです。

嵐があり

転ぶ。

幽霊たちが蔓延る街に、

ア・イの文句は滲んで消える。

涙の数ほどの人生など無く、

ただ湿っぽい土地の苔蒸して、

果たしてそれは叙情だろうか、

或るひとの云うことには

「オプティミストは苦勞するからやめときな」。

ラブホテルに絞殺死体。

抱き締めるに足らぬイズムと粘液。

夢があり

転ぶ。

矢印の指す曲がった向こう側に

更にその向こう側に。

更に更にと重ねて往くことの意味、

意味からの解放を求めて往くことの意味。

目的の無い逃亡など無く、

それ故に逃亡だけが逃亡して往くのだった。
転ときて

結ばない。

レコードは音も無く回りつづけた。

回ることの為に回りつづけた。

ときどきノイズが散って

また音の無い回転がつづく。

擦り切れ乍ら

(あゝ空白)

欠伸ばかり

(をなぞる あゝ)

で

(かかどつづれる、

(かかどつづれる、

かかどつづれる、……………

秋川久紫

もしも明日が…。
♪ (1983年)

たどえ 明日が欠けたとて
惑える人よ たおやかに
たどえ 明日が溶けたとて
揺らめく人よ 平らかに
今日を過ぎ 崩れゆく
愛を匿い 昏き
心のあわいを縫って
踊りましょう
かくて 明日が失せたなら
道識る人よ 熱くなれ
たどえ 月花 歪むとて
悩める人よ 潤いを
たどえ 恋文 裂けたとて
堕ちゆく人よ 安寧を
今日を了え 消え去りぬ

夢を抱えて 堅き

心の荒れ地に鋤を

下ろしましょう

かくて 海空 爆ぜたなら

骨ある人よ 歩き出せ

もしも 明日が欠けたなら

惑える人よ たおやかに

もしも 明日が失せたなら

道識る人よ 熱くなれ

道識る人よ 熱くなれ

〔原詞・荒木とよひさ〕

〔作曲・三木たかし〕

六本木純情派♪ (1986年)

朝靄の

夢の交差点

クラブを抜け出したの 凍えて

邪推だわ

ガチの綱渡り

諦め切れないから Hard Moment

心の散り散り

パズルにして 弾くだけ So Spicy!

Who am I?

負けたみたい 六本木

羽を閉じて 花びら銜える

Who am I?

蒼く苦い 六本木

惑いを映し出す 陽炎

始まりは

いつも不意討ちで

息もせずに 扉を押さえた

反撃に

甘めの手裏剣

視線の矢は 死ぬまで放たない

ドキドキするのは

ワルぶるほど ピュアだから It's Foolish!

Who am I?

涙知らぬ 六本木

笑い掛けて 砦にしている

Who am I?

勝ちが流儀 六本木

虚空を踊っている Lonesome Girl

心の散り散り
パズルにして 遊ぶだけ So Funny!

Who am I?

負けたみたい 六本木
羽を閉じて 花びら銜える

Who am I?

蒼く苦い 六本木
憂いを照らし出す 陽炎

〔原詞・売野雅勇〕

〔作曲・吉美明宏〕

坂入進

ジャックとベティ

ジャックとベティは互いに見つめ合った

もう何も言うことはなかった

ジャックは周回軌道に残り、ベティはブラックホールに飛び込んだ

ベティはジャックに顔を向けたまま、背中からブラックホールに吸い込まれていく

ジャックの視界の中でベティの落下はだんだん遅くなっていく

そしてついに止まった（ように見えた）

ベティは無限の哀感に似た微笑をその顔にたたえている

事象の地平に近づくにつれ、ベティの体重はぐんぐん重くなり、

ベティの時間はどんどん遅くなった

その速度はあまりにも遅いので、

ジャックの生涯の残り時間をはるかに追い越してしまう

だからジャックはベティの別れの顔を死ぬまで見続ける…

ベティにとってはどうか

ベティにはジャックへの哀感をこめた一瞥は一瞬のことで、すみやかに事象の地平を通過する

通過後、ベティは変容して、もはやベティと言われた〈実体〉はどこにもない

ベティは特異点と呼ばれるあの場所に向かい、

メールストロームを下るように

なおも落下する、のだろうか

ベティであつたものは眩く

重力と言われていたものの秘密を、私は、今感じている

重力はひとつの効果に過ぎなかった

あの境界を越えたとき、

そこには漏斗状の構造など何もなかった

暗闇を無限に落ち続ける恐怖もなかった

重力が消えたのだ

泡がはじけたのか

境界は膜のように拡がり

振り返ると、その向こうに、

今まで〈世界〉と呼んでいたものが映っていた！

宇宙、パスカルの無限の闇

無数の星々

でも、それらはプラネタリウムとまったく同じもの
ホログラフィックなプロジェクト
違うのは次元の数だけ

スクリーンの中央に、ジャックが見えた

ジャックは年をとって、髪には霜を置いていた

ジャックは、いずれは地球という近傍に帰るだろう

さようなら、ジャック

永遠の虚像のなかで、あなたの子どもをつくり
地球の辺境で埋もれることも出来た…

だけど永遠への渴きは、今、ここで成就されたの
自分の身を燃やす一本の蠟燭は

燃焼すらも喩にすぎないことを、今、知っている

倉田良成

青嵐凶

鉄斎詩篇から

粒のような楼閣を望む

あやうく截りとられた

緑苔の頬

そのきわをうねうねと

静脈のようにたどる羊腸の路に

父母の顔をした

驢馬ろばが居る

そのひとみにははるかな疎林

そのひとみには死者のように雲が流れ

おそろしい溪流の

白紐はくちゆうを悲鳴のように聴いている

楼閣の粒のなかに

さらにちいさな粒の人が坐して

極微の万華鏡、うごいてやまない石を打つ

絶頂ぜつてんに

野茨の冠のように被せられた

松やイチイ

その痛みの谿^{たに}を越え

寺という楽器がふいに鳴りひびく

父母の顔をした驢馬の眼で

中村剛彦

象徴の魔力 七ノ二

前回、蒲原有明の詩におけるキリスト教精神との結節点について、蒲原が生涯訳し続けたD・G・ロセツティの詩を参照して、明治から昭和の戦後期にかけてのキリスト教精神の「救済」概念について簡単に述べたが、近代日本におけるキリスト教受容史を調べているうちに、妙な恐怖感に取り憑かれてしまった。それは、私自身がまず信仰心というものを自覚的に持つておらず、そのような人間が、「詩と宗教の関係性」などということを書いたること自体、危険極まりないことで、下手をすると、どこぞのインチキ教祖ばりの言説に陥る可能性が大だからである。

たとえば、私のなかでキリスト教、仏教、神道の境なく、「宗教」なるものの威力を痛烈に思い知ったのは、何か神秘体験だとか、奇

蹟の目撃などではなく、以前もここで述べた、あのオウム真理教による一連の事件である。あれを宗教と呼ぶかどうかはまた議論の余地があるが、少なくとも、「カルト」と名付けられ、無差別殺人の動機が「世界救済」であるという倒錯が、小説や映画などのフィクション内であるならまだしも、現実に行われたことの衝撃は、ただ「カルト」ゆえ、という単純なカテゴライズでは収められないほどの大きさであった。それは事件当時に二十歳そこそこの私と同年代の若者の手によって実行されたことと、いまも若者を中心に信者が増えているという報道を目にするにつけ、日本人の精神にある「宗教」なるものの、異様に歪んだ在り方をもう一度問い直さねばならない時点に差ししかかっていると痛感せざるを

得ない。

いや、日本だけに留まらない。いま残酷な公開処刑をネットで流布する「イスラム国」の兵士に志願する欧米の若者たちの精神の在り様を見るに、現世界で起きている「宗教戦争」なるものが、オウムもそうであったように仮想国家を打ち立て、西欧中心の近代国民国家システムの秩序を突き破らんとする革命的暴力性を宿しており、単なる「テロリズム」、「カルト」と名付けるだけでは収めきれない状況に至っていると見える。いったい何が起きているのか。

どうやら、ここで「詩と宗教の関係性」を述べる際も、呑気な文献学的な調査などは学者に任せておき、私にとつては、より切実な私のなかの鎮めがたい「テロリズム」「カルト」と呼ばれてしまう暴力的詩精神を見つめなければ、ここに何も書く意味はないと思われるのである。たとえば、次の蒲原有明の、一見暴力性とは正反対の静寂の詩はどうだろう。いまは秋である。肌に直接秋の風を感じ

ながら読めよう。

秋の歌

柔らかき苔に嘆かふ
石だたみ、今真ひるどき、
たもとほる清らの秋や、
しめやげる精舎のさかひ。

並び立つ椈の高樹は、
智識めく影のふかみに
鈍びくゆる紫ごろも、
合掌の姿をまねぢ。

しめやげる精舎のさかひ、
石だたみ音もかすかに
翻る落葉は、夢に
すすり泣く愁のしづく。

かぎりなき秋のほひや、
白蟬のほそき焰と

わがこころ、今し、靡かひ、
ふと花の色にゆらめく。

花の色——芙蓉の萎へ、
衰への眉目の沈黙を。
寂の露しみらに薫ず、
かにかくに薄きまぼろし。

しめやげる精舎に秋は
しのび入り滅え入るけはひ、
ほの暗きかげに燦めく
金色のみ龕の光。

ここには何ら暴力的表現は見当たらない。
ただ詩人が観察するのは、この世の果てにで
もありそうな森の中の静謐な「精舎」であり、
いわば仏教的「けはひ」に満ちた静寂の世界
である。しかし私はこの「合掌の姿」の背後
に幾万の屍体の幻を見てしまう。もしかした
ら詩人は『平家物語』からインスピレーショ
ンを受けたのかもしれない。もしそうである

ならば、この静寂の裏には「平家」滅亡の残
酷劇がある。つまりこの詩の背後には恐るべ
き暴力性が秘められていると思えるのである。
この詩もまた『有明集』（明治四十年）に
収められているのであるが、果たして詩人は
「明治」という近代化が急速に進む大日本帝
国内で、なぜにこのような「非—近代」的な
詩を書いたのか。そしてなぜロセツテイの
「聖燈」のようなキリスト教の世界を翻訳し
つづけながら、この静謐な「秋の歌」のよう
な仏教的世界を詩作しつづけたのか。

蒲原は『大乘起信論』や道元の『正法眼蔵』
など多くの仏典を読み込んでいたことは前に
も触れたように自伝小説『夢は呼び交す』で
書かれており、実際に仏典に囲まれて育った
ことが竹盛天雄の注にもある。蒲原の墓は戦
前最大の右翼革命、二・二六事件の将校たち
が眠る西麻布の曹洞宗・賢崇寺にあるが、蒲
原の書いている仏教関連の言説から察するに、
宗派を問わず、仏教的無常の「けはひ」それ
自体に魅惑されている。いわばその象徴詩の

「朦朧體」を生む詩人の朦朧たる感性が、仏教思想を論理的ではなく独自にひとつの時代性として体内へ濾過していると見える。そしてロセツテイが描くキリスト教的「薰染」もまた不思議と同時に濾過されていく。このこととの不思議は、次の藤村の短編集『食後』の「序文」によく現れている。

「然しながら無為の陥穽にはまつた人間にもなほ一つ残された信仰がある。二千年も三千年も言ひ古るした、哲理の発端で綜合である無常——僕は僕の生気の失せた肉体を通じてこの無常の鏡を今更しみじみと聴きほれるのである。これが僕のこのごろの生活の根調である。矢張僕の神経や肉の纖維には仏教の蟲が食ひこんである見える。古本の紙魚を日光に曝らして払い落すやうに、この仏教の蟲が払ひ落せるものか、どうか。この蟲がそもそも轉變窮りなき夢を見せるのである。人間の芝居を人形の芝居として見せるのである。」

実に興味深い言葉である。藤村の『食後』は明治四十五年の出版である。これを私は、明治日本の戦争に塗れた「近代」の無惨な日常を描こうとした小説家（＝散文家）が、円熟期になり描ききれなかつた「迷妄」の物語群と捉えている。そしてこの蒲原の「序文」は、そのような藤村の「迷妄」を見つめ、かつてキリスト教の洗礼を受け、透谷らと「浪漫派」詩人として近代詩を切り開き、やがて詩人であることを捨て、自然主義文学へと道を開く作家への、「詩友」蒲原有明からの手厳しい同時代批判であると思える。いや批判ではない。この「序文」と「本文」は、いわば明治期の渾然とした「散文」と「詩」、そして宗教の「俗化」と「聖化」の臨界点を示している世にも奇妙な書物と私には思える。

「人間の芝居を人形の芝居として見せるのである。」

この近代象徴詩人の冷たい「半眼」は、いま繰り広げられる俗化した宗教による暴力世界をいかに捉えるか。「オウム」も「イスラム国」も、詩人の眼には「人形の芝居」と見えるか。

今回は、島崎藤村と蒲原有明が歩んだ正反對の道の分かれ目の、さらに先に臚げに見える「詩人小説家・森鷗外」にも触れつつ、果たして近代における「救済」とはなにかを考えてみたい。

新・思い出す事など

二〇一四年五月二十二日の朝方、私はまだかつてない意識レベルの低下に遭遇した。つまり、てんかん性のはげしい痙攣による意識喪失という緊急事態が生じたのである。

具体的には、起き上がったとき、きわめて不快な感覚があった。獅子頭のような被り物をした二、三人の救急隊員が、きつい口調で私に何かを尋ねていたが、たいがいは忘失してしまっている。あとで聞いた話では、そのとき私は失禁していたらしい。失禁は運び込まれた病院でも同様であった。とにかく、それから先しばらくの意識や記憶がまったく失われている。私の場合、てんかんの症状のうちでも幾分厄介な、重積という病態に落ち込んでしまったのである。

私はもともとてんかんの症状を持つ身では

ない。十二年前、肺から飛んだ腫瘍が頭部に来て、それを放射線で潰した結果、てんかんの病態を有する身となった（てんかんといつてもいままで意識をなくしたことはない）。

頭部のその跡に一種の嚢胞ができたが、手術によつてそこに穴を開けて人工的な弁をつくり、現在はそこに溜まってくる水を吸い上げるため、定期的に病院に通っているのである。

それが直接の原因とは断定できないが、この「定期的に病院に通う」というリズムがそのころ乱れ始めていた。こちらの事情とか、また医師のほうの事情とかによる。通常、二週間に一回というリズムが、今年に入つて三週間に一回とか、ひと月に一回という極端なものになつてしまつていた。気を失うほどの痙攣は来ないけれど、いままでにあまりな

かつた顔面に来る細かな痙攣が不安を催した。

自分のうちの寢室に救急隊員が来てからあとのことは、しばらく記憶がない。それでも判明・明晰にはほど遠いが、ある明度をもつて「現世」に還つてきた感覚があつたのは、あとから知つたが、意識不明となつてから一週間ばかり経つてからであつた。それは妻の「ワタシが来たから大丈夫だからね」という大きな声とともにだつたと覚えている。そこで初めて意識が戻つたか、それともゆめうつを繰り返したかともいうように、意識はあちらへ行つたりこちらへ来たりした。意識も、まつたくの「無」と、或る程度の（それがたとえ支離滅裂なものであれ）「内容」があるのと、それから意識レベルという点ではやや微妙ながら、「覚醒」状態とで、さまざまな言及が可能であらう。

このなかでとくに特徴的だつたのは、無意識に片足を突っ込んだ「半覚醒」意識状態だつたといえる。まつたくの孤独・独り、という感覚はつねに「無かつた」。どこかで何

かしら人の気配があつた。気がつくつと絶えず妻を捜している自分がいた。ただし、他人に對してはどこかしら敵對的、とまでは言わないまでも、なにかしらよそよそしい自己がいる。そして決定的にいままでと變つていたのが、内的意識の變容である。

どこでそれと知らされていたのか分らないが、「ここ」が「川」沿いにあることが絶えず念頭にあつた。それが意識のスクリーンにどう転化したのか、水族館のガラスの壁面のように窓のいちめんに水に似たものが泡立ち、流れてゆくのである。それを視覚的にはつきりと「見た」。けれどおそらくは、私はこの時点で確実に仰臥ないし横臥していたはずなのである。客観的には、ここは病院で、すぐそばを鶴見川が流れている、という事実がある（あとから知つたのだが）。しかし耳から入る情報以外、ほぼ私はこのことを知る術を持たない。にもかかわらず、私は私のことを「仮」にかくオリエンテートしていたといえる。なお、この「水の流れ」の感覚は、現

実的には私につながれた人工呼吸器ほかのさまざまな管の音からやって来たのではないかと妻は疑うのだが。

しかしこの「仮」オリエンテート状態はじつに複雑な陰翳を含み、半覚醒から確実な覚醒までの何段階もの層が存在した。「ワタシが来たから大丈夫だからね」という妻の声はその混沌のただ中で発せられたのである。そのとき初めて現在につながる覚醒状態を獲得し得た。妻は私に氷菓のようなものを与え、また来るからといってどこかへ去ったが、それは私に非常な不安と苦痛をもたらすものだった。イメージとして妻はいわば暗い森の奥のほうに行ってしまった。そのあと、いつとき病態の水面に貌をもたげた意識は、またふたたび混沌のただ中へ沈んでしまうのだ。

このとき私が覚えた不安と苦痛は私の半覚醒状態の常態となっていた。そんなはずはないのだが、私は病院内のあちらこちらをさまよい、いろんな奇妙な現象に巡り合っていた。ひとことでは言えるものではないが、譬

えれば、まるで奇妙なアリスの国へ来てしまったようなのである。まず、妻の顔は見るたびに容貌を変え、いままでにあるはずもなかった縞のような蔭や染み、ソバカスが見て取れた気がした。それも日ごとにちがうのだ。看護師（男性）の気配は常にあつた。私も敵対的であつたが、相手も私に敵対的だった。深い院内を私がさまよっていて（と思つている）、彼に妻はいつ来るのかと聞いたら、「ソウイウコトダカラ、オマエノ女房ハ来ナインダ。オマエモ、オマエノ親モ一族ゼンブガソウナンダ」と、さんざんののしられ、呪われたのである。ここはどこなのかと、あらためて思わされた。アリスの国の水の壁面には何とも形容しがたい形象が泳いで行き、あたりは色とりどりのあぶくや水玉だらけになつて、私はこんな状態になつて死ぬまでここで閉じこめられて過ごすしかないかと、絶望的になつた。

医師や看護師の「発言」のひとつひとつに、フランス語が反射して聞こえた。継続

してシャンソンが耳のあたりで鳴っていた。私は、医療とはじつはフランスが本拠・原典であると奇妙に信憑していたのである。やがて、かなり「覚醒」に近いところで目ざめ、「現世」に対したとき、当然妻や他人である医師や看護師等への受け答えを半ば強いられながら、滑舌は完全に解体してしまっていた。酩酊したように口が思うようにならず、概念や単語がどこか遠いところへ去つて、いかようにしても思い起こされないのだった。この滑舌の悪さはいくぶんか現在も継続している。

やや人心地がついてからは、折あるごとに看護師等により「いまは何曜」「何月何日」「ここはどこ」ということを執拗なまでに確認させられ、了解させられた。そんななか、さきほどのフランス語のエピソードに類するものとして、私自身のかなり古層に眠る歌や歌詞が浮かびあがってきて、耳のあたりで鳴るのである。高校生のころ、中学生のころ、それどころか小学生のころのそれが、まるでその

時を生きているように、季節の感覚とともに甦るのである。この「季節」を「自然」と言い換えてもいい。この「感覚」は、退院して二カ月以上経つ現在ではほとんど消滅している。それらの「歌」は、いまでは教室で教えられることがないらしいヨーロッパの民謡や、ロシア民謡、幼いころに聴いた歌謡曲などをふくむ。それらの旋律や歌詞がおどろくほど近い距離で迫ってくるのだ。それは同時に、当時の自分が生きられているという感覚も同期している、といつてもいい。私はそのとき、完全に受け身で、無力であったが、そのことがすなわち青少年期以前を喚起したといえるのであろうか。

「意識」を呼び起こされたところで、私の「現世」へ帰還するためのやや苦しい訓練が始められる。「意識」を呼び起こすとは、まずすべての管を躰から外すこと、すなわち、喉の奥に入れていた人工呼吸器の管、鼻から挿っていた栄養のための管、四肢を拘束していた縛め、導尿管などからの解放である。こ

れにはかすかな実体的な苦痛と、それに倍する本質的な不快感がある。それら一連の作業のあと、「意識」を取り戻した困難な日常が始まった。

とりあえずは鼻からではなく、口から栄養を摂取しなければならぬ。まず醤油や出汁やバターの香味のする各種ゼリー状のモノから、おなじものの固粥状、それから平常の食事に移ってゆく。これと並行して、躰に付けていた最後の管、すなわち点滴の管を外す段階に至る。付け加えなければならぬのは、導尿管のためにこちらのほうは面倒なことでもなかったのだが、問題となったのは三日に一回は避けることができぬ大便のことである。これは、ことごとく看護師のお世話になった。ここで注目したいのは、その作業に当たる看護師のすべてが女性であったことで、それは何か理由があるのか、たまたまであったのかはいま以て分らない。排泄のことは、ことに相手が妻以外の異性ということもあり、その欲求を訴えるのにかなりの抵抗があった。

しかしこればかりは致し方ない。

そうこうするうち、「現世」からは私の病室に、YさんとN君がお見舞いに来てくれた。私が意識を無くしていた間にも、大量に投下されたプロポフォルその他の薬品の影響によるものかと思うが、躰の全体が猛烈に痒かった。Yさんはかねてから私の躰の全体のことを気遣ってくれていて、今回のことでも妻からの要請で来院してくれた。N君とは翌日の昼、病院の展望室のような場所で、初めてベッドから離れておしゃべりすることができた。彼はペットボトルのお茶を飲み、私にはしかしそれを直接に飲むことはまだ禁じられていた。水分が噎せるので、それを「とり」とさせる成分の入った粉末を、私に与えられるあらゆる飲料に混ぜなくてはならないのである。こればかりはかなり苦痛で、やや時を革めてこの禁制が解かれたとき、すべての自動販売機から転がり出てくる冷たい飲み物は甘露の味をきわめた。N君との会話で、どうしても出てこない学匠詩人の名があつて

苦しんだが、だいぶ後にそれが折口信夫のこ
とと分かり、同様のことは他にもおびただし
くあつて、まず思い出されている単語や概念
のほうが少ないといつていい。

しかし、物語はこれで終わりではない。躰
のほうはようやく安定状態に入ったというだ
けで、血液から精査される諸数値にはまだま
だ油断しかねるものがあつた。それと、安定
期に入ったなら入つたで、かならずやらなく
てはならないことがある。それがリハビリ
テーションだ。私が入院した病院ではこのリ
ハビリテーションに関しては、三系統が合わ
さつて一本となつた体制をとつている。すな
わち、言語・記憶、体幹・四肢、手先の手技
などである。安定期に入つてこの三系統から
一日に何度も呼び出され、そのたびにいささ
かならず肉体的かつ精神的な疲労を感じたが、
同時に手応えも感じていた。じつさいに退院
する直前、ことに「廃用」とされた右手にや
や動きの改善さえ見られるほどであつたから。
現在はまたもとに戻つてしまつているのだが。

この、三系統のなかでもつとも特徴的で
あつたのは言語・記憶に関するものである。
さいしょ、「記憶」が戻つてきたとき、妻や

看護師との会話で出現する我が家の像がきわ
めて曖昧なものであつたのは、じぶんでもあ
る種おどろきであつた。妻に聞かされても
ちつとも腑に落ちない。だいいち、じぶんの
うちのトイレがどこにあるのか、どこである
のか、まるで分からなくなつていて。家がマ
ンションの一室であることだけは了解してい
るが、しかしそのマンションのある場所が、
どうやら引越す以前住んでいたイメージを
帯びて、つまり現在と異なり、背後に林があ
る丘の立つイメージを帯びて浮かんではいるの
だ。と同時に、記憶の分野で痛感させられた
のが、記号や数字に関しておそろしく脆弱に
なつていて自己像だつた。自分の家の所番地
が言えない、電話番号も完璧に忘れていて、
そして、簡単な九九や暗算がまるで不可能
だつたことがなによりショックだつた。いま
ではだいぶ回復はしてきているけれど、記憶

の像や記号、数字に対するいわば俊敏さというものはだいぶ失われてしまっている。しかし私だけの感覚かも知れないが、この俊敏さの喪失を積極的には取り戻そうと思わないのは、もしかしたら、このたびの大厄から得られた智慧のようなものかも知れない。

退院の日は日曜日で朝から冷たい雨が降っていた。時間ぴつたりには妻は来た。妻はいくつかのことをナースに確認し、手続きをしてガランとして誰も居ないロビーを出た。そして病院前に一台だけ停まっていたタクシーに乗って、二人で家に帰った。

長尾高弘

第一四回無意味な意味の尾形亀之助読書会

二〇一四年三月一六日

於：大河原駅前コミュニティセンター「多目的ホール2」

『詩の源流』

(第一四回無意味な意味の尾形亀之助読書会として、二〇一四年三月一六日に大河原駅前コミュニティセンター「多目的ホール2」で発表した内容に、あとで考えついたことを「追記」として書き足したものです。なお、話の冒頭は、この会の主催者で、私を誘ってくれた小熊昭広さんと知り合ったきっかけやら、自己紹介やらなので、省略させていただきます。ご覧になりたい方は <http://bit.ly/1o3IEvm> を参照してください)

● 『新体詩抄』が日本の詩の始まりなのか？

詩の歴史は新体詩抄からなんですか、つていう疑問形で始まっていますけど、現代詩のようない詩つていうのは新体詩抄から、明治からはじまったんだって一般的に思われて

いますよね、そういうことだからそれまでは短歌だとか、俳句だとか短いものしかなかったと、日本には本格的な詩がなかったと、そういう話になっている、今、現代詩を書いている人も一応その歴史はそういうものじゃないのかなって、だいたいの方は思われている

んだと思うんですけどね。そもそも日本には今までずっと短い詩ばかりでちゃんとした詩はなかったんだよっていうのは、この新体詩抄の序文にあることです。三人の著者がそれぞれ序文書いているんですけども、一番面白いのが外山だと思っんで、ちょっとひとつ、外山だけ、印刷もしていただきました。このレジュメ（別紙 <http://bit.ly/1rjy11L>）の一番最初ですけど、新体詩抄序っていう二枚組の一枚目の上のほうにあると思いますが、九行目ですかね。

殊に近世に至りてハ、長歌ハ全く地を払へる有様にて事物に感動せられたる時の鳴方ハ皆三十一文字や川柳や簡短なる唐詩と出掛け実には手軽なる鳴方なればなり、蓋し其鳴方の斯く簡短なるを以て見れば、其内にある思想とても又極めて簡短なるものたるハ疑なし、甚だ無礼なる申分かハ知らねども三十一文字や川柳等の如き鳴方にて能く鳴り尽すことの出来る思想ハ、線香烟花か流星位の思に過ぎる

べし

線香烟火か流れ星だっという、そういう詩じゃないことを俺達はやるよというのが新体詩抄だっただっというんですね。

●日本の詩には歴史がないというコンプレックス―鮎川信夫、飯島耕一

それを現代もずっと受け継いでるみたいなんですね、日本の詩には歴史がないという詩人たちのコンプレックスって今ボードに書きましたけど、たとえば鮎川信夫がだいたい年とってから書いた『宿恋行』に入っている「必敗者」っていう詩があります。結構この詩私好きだったんですけどね。どういう詩かっていうと結構長いんで、そっくり読む時間はちよつとないんですが。コーネリアスっていう無名詩人が惨めな思いをして、惨めな思いをして嫌な一日だっことで帰るときに、一四世紀スコットランドの詩を口ずさみながら

帰って行くっていうシーンがあるんですね。そういうのをひと通り紹介して、それは小説のなかのことで、小説の作者も惨めな思いをして、悲惨な死に方をしてるっていうことを紹介しているわけなんですけども。まあちよつと話が複雑ですが、それで、その一番最後のところですね、ちよつと日本のことを振り返って、多分自分のことを言っているんだと思うんですが、こういう何行かがあります。

ところで 日本の社会の日蔭を歩む
われわれのコーネリアスは いまだここにいる
のだろう？
制度の春を病むこともなく…

まあ七〇年代ぐらいなんですけどね。

不確定性の時代を生きて

自殺もせず 狂気に陥らずに

我々のコーネリアスはどこまで歩いて行ける

だろう？
口ずさむ一篇の詩がなくて！

ってここビックリマークもついているんですが、「口ずさむ一篇の詩がなくて」って一四世紀から親しまれた詩なんてのはない、まあそう言いたいわけですね。日本には詩がない。伝統の詩がなくて、口ずさむ一篇の詩すらない、と言いたい。たとえば鮎川信夫もそう思っていた。そのころ、つまり七〇年代の終わりに、鮎川と吉本隆明、大岡信とで、近代日本詩史の鼎談集みたいのも出していますけれども、一生懸命、『新体詩抄』の前を探しているんですよ、賛美歌があったとか、それから勝海舟の訳詞があったとか、現代詩っぽいものは一生懸命探してくるんですけど、それ以外、やっぱないよねーって話で終わっているんですね

(追記：この部分ちよつと不完全でした。
『討議近代詩史』(一九七六年八月、思潮社)

では、大岡氏が『新体詩抄』の「鎌倉の大仏に詣でゝ感あり」について、まるで和讃だと言っています(同書二四頁)。和讃はあとでも軽く触れますが、芸能の七五調の祖先のような存在です。ただし、厳密に七五を貫いているところが、私の取り上げようとしている「叙事詩」とは少し異なります。私は七五を部分的に組み込みながら、散文のような部分もあるものに注目してこのあとで紹介しています)。

そのあと、飯島耕一の定型論争つていうのがあるんですよね、八〇年代の終わりから九〇年代にかけてかな。飯島耕一さん、亡くなられましたけど。彼がやっぱり西洋の詩と違つて日本の詩には歴史がない伝統がないから、型がない。結局は歴史がないから型がないつて発想になつたんだと思うんですけど。確かに短歌と俳句はあるけれども、それ以外にはね、つていうのがあつて。で、そういう音数律ではなくて自分のリズムを作る、つて

いう非常にわかりにくい話をしていましたけど、その話自体ここではどうでもいいんですが、やはりその日本の詩には歴史がないんだつていうコンプレックスからの議論だったんじゃないのかと思うんですね。

●『新体詩抄』から日本の詩が始まつたなんてとんでもないという考え方―谷川雁、松永伍一

じゃあ現代詩人みんなそういうふうに思つていたのかつていうと、ちゃんと例外もいます。それが三つ目の項目ですが。谷川雁つていう人が、一九五九年に書いたエッセイで、この一枚目の下の方の真ん中へんぐらいに入りますが

現代詩の真の祖先は外山某とかいうピスマルク風の先生ではない。あえていえば世直し一揆の最高形態武装農民軍長州奇兵隊の軍歌『宮さん、宮さん』というべきであろう。売

られた娘たちの蹶起を歌う『このめのストライキ』であろう。

（「現代詩における近代主義と農民」、1959年3月『詩学』、『原点が存在する』新装版、現代思潮社、1969年、pp.101-102）

っていうふうに言っているんですね。「宮さん、宮さん」っていうのはちよつと、ミスリーディングでこれは東北攻めてきた偽官軍が歌っていた歌ですから、こんなのはダメなんですけど。要は言いたかったのは『新体詩抄』っていうのは東大の教授三人がやつてる、上からこう啓蒙的に詩というものを押しつけてきた、そんなものを詩の歴史の頭に考えているから、お前らだめなんだろうというのを谷川雁は言いたかったと思うんですね。一応、「宮さん、宮さん」も「しののめストライキ」も音源は見つけてきたんですが、「宮さん、宮さん」はうつとういしいので「しののめストライキ」ちよつといきましようか。

<http://www.youtube.com/watch?v=X8MQfa5mJFs>

ちよつとストライキな部分ここだけなんで（一番のみ）、ここで終わりにしておきますけど。こんな感じ、だったんですね、添田啞蟬坊って、ご存じの方多いと思いますけど、あの明治時代の演歌師ですね。演説といっしょに歌を歌っていたんですけど、演説から歌を歌う方になつていったのかな。で、だんだん演説、自由民権運動とかからも切れて、ただほんとに芸人になつていつちやうグループも出てきたんですけど、添田啞蟬坊は世間に批判的なことをずいぶん歌っていましたね。ただ、現代詩の祖先っていうふうには今、あんまり認められてはいないだろうと思いますね。ちよつと歌自体は非常に寂しい感じですけど。聴いたことあるメロディーだと思えます。まあこういうことを谷川雁が言ったので、これを拾ったのが松永伍一さんで、『日本農民詩史』っていうこんな分厚いのが（指で五センチくらいの長さを示す）五冊ぐ

らいあるすごい本を書いた人ですけども、その中の冒頭の部分で、私も全部読んだわけじゃなくて、冒頭の部分しか読んでないんですけれども、この谷川雁の発言を受けて、印刷物の谷川雁の後ろのところですね。

「近代日本の農民詩は、これら土着農民……」って言っているこの農民というのは佐倉惣五郎、江戸時代の将軍に直訴して藩主の暴政をやめさせたために一家皆殺しの刑に遭うわけですけどその庄屋の人が千葉にいたわけですね。その佐倉惣五郎を取り上げて、あとでも出てくる歌舞伎や瞽女歌でも、佐倉惣五郎を取り上げたものいろいろありますが、そのなかの口説くどきっていうものを取り上げたりして、続きます。

これら土着農民の闘争を基点として創造さるべきであったにもかかわらず、表現能力をみずから育てることのできなかつた農民は、ついに明治初期の「新体詩」を否認することのないまま文字から閉鎖された立場をやむなく

守りつづけたのである。

（『日本農民詩史』上巻、1976年10月、法政大学出版局、pp.12-13）

つてことを書いてあるわけですが、ちょっとまあ松永さんは多分現代詩的なものをいきなり江戸時代の農民に求めるような、ちよつと繋がらないかなって僕はここ読んで思うんですけど、ただあるべき姿として新体詩ってものから始まる発想はダメだろうっていう考えはしっかりとあつたわけですね。

（以下、次回）

confidence

家の近くで一年以上も建設工事をして
いる。それで防音のヘッドホンというのを
買ってみた。きつくて暑くて重いけれど、
(大切なことも)何も聞こえません。(後
藤)

秋に入り、月を詠んだ平安から鎌倉時代
の和歌を読んでいる。式子内親王や永福門
院や……。そうして犬とともに秋の風を浴
びながら、夕陽を眺め、月を眺めること
よろこびは、なんだろう。半月の光の分
だけ、いままで見えなかった人生の陰影が照
らされているような。今月で犬は十歳であ
る。ゆっくり歩いていこうと思う。(中
村)

早朝にタチウオが3尾釣れたから、今日

も明日も焼いて食べます。(福島)

おかげさまで怪我は治りました。ついで
に、夏には胃カメラをのんで、大腸内視鏡
もやりましたが、ほぼ完璧な結果が出まし
た。でも、気になっているところはまだ
あつたりして。(長尾)

前回あとかきを書いた後、いろいろな
ディスクを聴いてみましたが、やはりブ
ラームスのピアノ協奏曲のどちらを選ぶか
と問われたら、僕は1番だと答えるでし
ょう。2番は余裕もあつて、いかにもブラ
ームス、といった感じなのですが、1番の繊
細さが僕を捉えて離さないのです。特にル
ドルフ・ゼルキンをソリストに迎えたセル
十クリーヴランド響は最高だと思えます。

(野村)

先日、刊行した散文集『光と闇の祝祭』

(私家版)には「批評を批評する」という裏の目的がある。例えば二十年前に刊行された詩集を取り上げることはあつても、三年前に刊行された詩集を取り上げる批評は極めて少ない。消費社会のスピードに毒された者たちが、皆即時性を重視しており、詩の批評もそこから自由ではないからだ。

例えば「今年の収穫」などという某商業誌の慣習は、常に短期間では読み込むことが出来ない名詩・名詩集を埋もれさせてしまふ危険を孕んでいる。批評というものは、本来、いつ書かれても構わないし、真の作品の評価は消費社会の時間の流れとは別の次元で、批評者の人的力学を超えた地点でなされるべきものだ。例えば今回、三年前に刊行された北原千代の『繭の家』の詩集評を書き下ろしてここに収載したことに、

そうした自分の思いが反映されている。

(秋川)

夏の終わりに、東北に行った。被災地、といつまでも呼ばれるのは本意ではないのかも知れないが、とある被災地に足を運んだ。津波に押し流された街で、当初は瓦礫の山であつた海岸沿いのエリアも撤去が終つて、奇妙なくらいに何もなかつた。

たつた一棟だけ残された傷付いた住宅、横倒しにされた墓石が集められた一画、火災で黒焦げになつた校舎、それ以外は、一面何も無い区画が広がつて、ただ背丈ほどの草が茂っている。そのように〈空地〉と呼ぶべき場所が、津波に遭わなかつた街並に隣接しているのは、互いを互いに異物であると感じ合っているように見えた。(浅野)

火野正平「こころ旅」(NHKBS)を

食い入るように見ている。自転車に取り付けられたビデオカメラは道端の生け垣や溝、家並みなどを延々と映し続ける。それから目が離せない。名所・旧跡などはあまり出てこない。国道など大きな道は出来るだけ避け、裏道伝いに視聴者の投稿した「思い出の場所」に向かう。いわばセンチメンタルジャーニーのしつらえなのだが、私が惹かれるのはその（途中）に出てくるもの。ごちゃごちゃして不揃いな建築群、寂しく猥雑な商店街。自転車しか通れない裏路地や畦。それは、私がよく知っているものだ。この既視感：雨に降られ、向かい風に吹かれ、やっと「思い出の山」に辿り着いても、山は全く見えなかったりする。その見えないう山に向かって、手紙が再読される。正平は「俺たちに山はない」などと洒落ているが、鳥の声や雨滴の音のみで、見えない山を延々と映すところは、この番組の真骨頂である。（坂入）

今年の夏に、道東の木村和史の「現場」に5日間ほど滞在した。すべてが「progress」という風情だったけど、慌ただしさはない。彼の家、彼の森というより、私的な所有をこえた「原野」という感触が強く漂い、はるかなものを感じさせる。徹底的に人を突き放す自然の世界だからこわくもあるが、その底にたしかな優しさもある。釧路に帰省中の岩田英哉と三名で阿寒湖近くの人気のない溪流で釣りをした。熊に食われてもよかったかもしれないが、われわれは無事生還し、木村シェフの天ぷらで川の恵みを堪能したのだった。（水島）

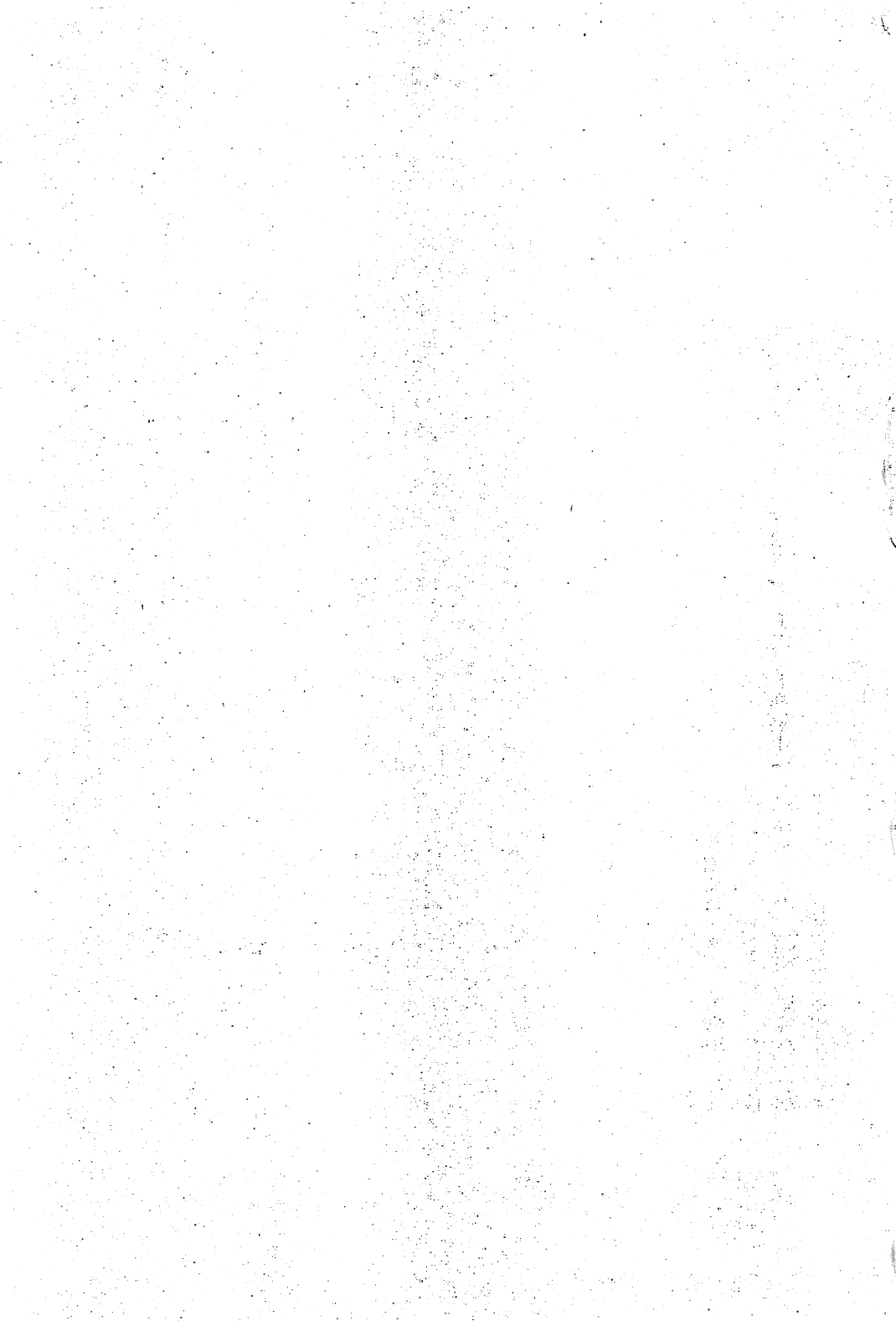
蒲田という街に住んでいたことがある。東京の南端、ターミナル駅のある街だ。ひとの往来も多い。だが底知れぬ「うらぶれ感」が何処にも漂っていた。例えば街を貫くドブ川があり、深夜の駅で身を寄せて座

り込んでいるカップルがあり、立ちんぼが平然と交番前で客引きをしていた。また「柳通り」という旧赤線地帯が枝状に広がっており、そこには「場末」のスナックやバーが軒を連ねていた。住宅地は古く、路地はすぐに行き止まり。はじめてマンガ喫茶に住民票を置くことが認められたのも蒲田だった。何処から来ても所在なく、だが裏返して何処でも居場所に来てしまうような、誰をも拒まない街だった。そういう蒲田が心地好かった。いま、その街が再開発によって大きく様相を変えようとしている。「柳通り」は消え、巨大なビルが猥雑さを押し潰さんとばかりに街を「クリーン」化する。街もひとつも移ろうものど解りつつ、わたしはひとつ帰る場所を喪った気分だ。(小林)

定年退職した友人と、阿佐ヶ谷を散策。
スターロードの果てに『名曲喫茶ヴィオロ

ン』はあった。ドアの外に立つと『マタイ受難曲』が漏れて聴こえる。一瞬、赦されたように錯覚した。Kommt, ihr Töchter, helft mir klagenは、バッハ作曲『マタイ受難曲』冒頭——来たれ娘たちよ、ともに嘆け。(和田)

障害者手帳を持つようになってから、むしろよく出かけるようになっていく。というのも、家でじっとしているとそれだけで筋肉やその他フィジカルな面が衰え、おそろしい事態に立ち至ってしまうからだ。十月は横浜では色々なフィスティバルがある。横浜トリエンナーレや横濱ジャズフィスティバルなど。手帳があるので割引きになるが、妻の介助がないと外出もかなわないのでいささか厄介である。また、出かけるとなるとそれなりの肉体的な負担を覚悟しなくてはならない。(倉田)



ET 第43号 / 2014年10月15日

編集発行人 / 倉田良成

〒230-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ 201

Eメール / kateis11@k3.dion.ne.jp